

平成23年 日本建築士会連合会賞

審査総評 作品審査委員長 村松 映一

第39回会員作品展の応募状況は全国建築士会より102点の応募があったが、昨年対比44点の大幅な減少であり、特に東京都12点、愛知県7点、大阪府10点、大都市圏での減少が顕著であった。ちなみに本年の2月18日が応募締切であり、3月11日の東日本大震災の影響はない。また、被災県の応募は岩手県1点、宮城県1点、福島県2点あったが、内陸であつたため幸いにも被害は免れた。千葉県2点のうち1点にガラスの損傷が一部あったことが報告されている。

大都市圏での応募点数の減少は市場の縮小に歯止めがかからず、大規模はもとより中規模なプロジェクトに至るまでその影響が及んでいる可能性があるのではないか懸念される一方、会員作品展に相応しい作品が応募されずに埋もれていることも十分考えられる。会員の積極的な応募を願ってやまない。

なお、応募作品を建物種別に見ると、住宅59点(集合住宅を含む、応募総数全体の57.8%)、宗教、学校、研究所などが28点(27.5%)、オフィス、店舗などが15点(14.7%)である。住宅は昨年の48.6%より増加、オフィス、店舗は減少している。

4月14日に書類審査を行い、18点を現地審査の対象に選び、5月初旬より順次現地審査を行い、7月12日に鈴木委員(欠席)を除く7人の審査委員により最終審査によって優秀賞4点、奨励賞7点を選出した。最終審査は分担して現地審査を行った各審査委員の講評を踏まえて全員で討議を行い、全員の賛同を得て決定した。

11点の入賞作品の講評は各審査委員に委ねるが、特に印象に残った2点の作品について感想を述べたい。

1点は、「尾崎呉服店・尾崎邸」(鳥取県鳥取市)である。鳥取で生まれた著名な画家尾崎悌之助(故人)の古民家、数寄屋の母屋、土蔵、アトリエ、店舗からなる住まいを家族構成の変化に伴い、母屋と土蔵(実家・改修)を残して

新たな住まいを再生するプロジェクトである。第一段階で古民家、アトリエ、土蔵(一部)を解体し、若夫婦の住まい(鉄筋コンクリート造)の新築と土蔵の実家・改修を行い、3年半後に既存店舗を解体し、呉服店、質店、フリースペースが各階にある3階建ての店舗(鉄筋コンクリート造)を建て、母屋と1階で繋ぐことにより3世代が生活する住まいと店舗が完成する。5年以上の歳月をかけた作品である。中庭を媒体に母屋、若夫婦の住まい、店舗が古の記憶を継承して連なり、表通りは現代の表情を、裏小路は古の商家の風景を醸し出している。根気よく取り組んだ建築主と設計者の想いは衰退しつつある商店街に新たな息吹をもたらすに違いない。

もう1点は、「塩尻市市民交流センター」(えんぱーく)(長野県塩尻市)である。衰退しつつある中心市街地活性化の拠点として、図書館を核に交流センター、子育て支援センター、商工会議所、民間オフィスなどからなる複合建築であり、再開発事業として2006年の公開設計競技で選ばれた作品である。自然光の降り注ぐ4つの広場を核とする3層の内部空間は、3種類の幅を持つ鋼板コンクリートの壁柱97本によって支えられている。壁柱の連續性、外部からの透明性、回遊性、安全性を確保しながら森のようにレイアウトされている。それでいて壁の存在を強く感じない不思議な空間である。4階には自立した施設を囲むようにアルプス連峰を望む市民のための交流広場が設けられ、4つの広場へ自然光が送り込まれている。道路の反対側にある既存駐車場からブリッジを新設し、車利用者への配慮がなされている。基礎免震構造の採用によって生み出された空間は、各々の用途を有する空間を有機的に繋げ、新しいコミュニティを誘発する空間として十分市民の信頼を得ている。設計者の提案したインキュベーションリーダーと市民の縁による企画・運営が、そのことを物語っている。